

デザイナーのための経済コラム(61)

多様性・diversityと共生・symbiosis

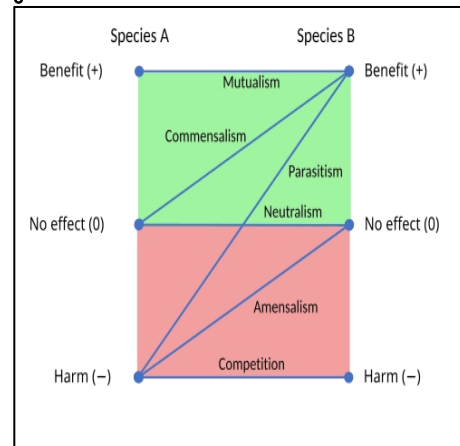
国連が推進しているSDGsの基本コンセプトの一つが多様性の・diversity、共生symbiosisだと思います。生物の多様性、文化の多様性を「なんでもあり」とすることなのかと考え込んでしまいます。社会の多様性、ライフスタイルの多様性を「なんでもあり」とすると、極貧と富豪の格差、自国優先主義、経済効率優先主義、独裁主義、非人道的な残虐行為などなどを容認することになります。

そこで必要なのは共生・symbiosisだと思います。共生と聞くと「仲良く、共に助け合って生きる」というように、楽観的、希望、理想のようにも思えますが、もう少し深く考えるとそうではないようです。自然界の生物がすべて「仲良く、共に助け合って生きる」わけではなく、動物の世界では食物連鎖・弱肉強食が常態です。移動のできない植物の世界でも、その土地に最適な植物が他の植物の繁殖を許容することはなく、最終的にその植物だけの群生を形成することになります。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/共生>

生物学者は共生・共棲の形態を6つに分類しています。

- ① 相利共生（そうりきょうせい、mutualism）
双方が利益を得る共生。
- ② 片利共生（へんりきょうせい、commensalism）
片方のみが利益を得る共生。
- ③ 中立（ちゅうりつ、neutrarlism）
双方が利益を得ず、害も被らない共生。
- ④ 寄生（きせい、parasitism）、捕食-被食関係
片方のみが利益を得、片方が害を被る共生。
- ⑤ 片害共生（へんがいきょうせい、amensalism）
片方のみが害を被る共生。
- ⑥ 競争（きょうそう、competition）
双方が害を被る共生。



異なる2種の生物の利害関係を図解したもの

互いに利益
片方に利益
互いに利害なし
片方に害
双方に害

生物学者が認識する生物の共生のパターンには倫理観や正義感、理想は込められてはいません。自然を人間の価値観を持ち込まずに客観的に観察した自然の現象、状況です。

生物学者が認識する生物の共生のパターンを人間関係、企業関係、国際関係に当てはめて考え、ハッとしました。合法的な活動がすべて①の相利関係にあるとは限りません。現代社会はさまざまなハラスメント、経済搾取、経済格差、経済犯罪、経済戦争、武力戦争など限りなく理想とは遠い世界です。

しかし、クールな生物学者は①から⑥までの共生パターンがあるからこそ自然にバランスが取れているのだと言います。人間の価値観で、経済開発、社会開発と称して自然に介入すると自然破壊、環境破壊になるのではないかという意見もあります。新型コロナウイルスによる世界的なパンデミックは人間の価値観では好ましくないことだったけれど、自然がバランスを取る自然な現象だとも言える、とも言っています。だとすると、人間社会の好ましくない現象も自然と同じように社会がバランスを取るように動いているといいものなのか。「国富論」のアダム・スミスは経済変動は「見えざる神の手」による、と言っています。

共生を平和なもの考えるのは幻想、妄想かもしれません。勝手な思い込みかも知れません。たくましく、力強く生き抜くにはクールに、現実的に生きるには、生物学的な視点が必要かも知れません。

生物の多様性保護のコンセプトは自然のバランス回復、バランスを崩さないこと、遺伝子の価値は生物の存在価値そのものと認識することだと思います。しかし、好ましくない、ネガティブな人間社会の多様性は排除しなければならないと思います。多様性を発展させる方向が課題だと思います。それは政治の世界では政策であり、美術、文学、造形の世界では、コンセプト構築だと思います。

(T. K.)